

# 私立幼稚園における 「気になる子ども」の保育の困難さに関する調査研究 —自由記述の分析を中心として—

尾崎 啓子\*・吉川はる奈\*\*

キーワード：幼稚園教諭、「気になる子ども」、発達障害、質問紙調査、自由記述分析

## 1. 問題と目的

学校教育においては、発達障害を巡って、障害児に関する教育政策が大きく転換し、2005年の発達障害者支援法施行、2006年の学校教育法の改正などを経て、2007年4月から「特別支援教育」が正式に始まった。文部科学省は、2003年から「幼稚園における障害のある幼児の受け入れや指導に関する調査研究」（幼児教育課）を進めており、2005年から開始された特別支援教育体制推進事業では、それまでの小・中学校に加えて、幼稚園についてもその対象としている（柘植、2008）。

文部科学省の調査（2002）によれば、注意欠陥多動性障害（ADHD）、学習障害（LD）、高機能自閉症のため学習や生活について特別な支援を必要とする子どものうち、小・中学校の通常学級に在籍している児童生徒は6.3%程度の割合であると報告されている。この割合は、幼稚園・保育所の中にも、同程度の特別な支援を必要とする子どもたちが在籍する可能性を示唆するが、知的障害を伴わない発達上の障害は、その顕在化が学齢期以降である場合が多く、乳

幼児期における早期発見が難しいため、就学前の発達障害児の実数把握は困難な状況である（池田ら、2007）。先行研究によると、2005年に鳥取県の15市町村で行われた5歳児健診の受診者1,359人中何らかの発達障害が疑われた子どもの割合は7.3%、2006年愛知県豊田市の公私立保育園と公立幼稚園81園に在籍する8,361人の中で発達障害の疑いがあった子どもの割合は4.5%（日本子ども家庭総合研究所、2008）、また平澤ら（2005）の調査では143ヶ所の保育所・園の全在籍児17,464人のうち「気になる・困っている行動」を示す子どもが4.5%いる、としている。筆者らが東京都内や埼玉県内で行っている子育て支援や発達支援相談室での相談においても、近年、幼稚園や保育所の保育者から、発達障害の特徴を持つ「気になる子ども」の保育に関する悩みや指導上のアドバイスを求められる機会が増えている。

そこで、私立幼稚園教諭を対象とし、保育者が保育上「気になる子ども」を抱える悩みや困り感、対応の現状を明らかにすることを目的とした質問紙調査を行った。結果から、回答者の大半が保育現場で「気になる子ども」に出会っており、その保育に負担感を感じていること、相談先はあるものの、障害に関する知識の不足などから相談すべき状況なのか悩んだり、保護

\* 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター

\*\* 埼玉大学教育学部家政教育講座

者に相談を勧めにくいといった保護者との関係形成に困難を抱えている状況が明らかになった。また、質問紙の最後に設けた「その他保育上困難を感じることにについて（自由記述）」欄の記入が大変多く（全回答部数の35%）、「気になる子ども」の保育に関する関心の高さがうかがわれた。

全体の傾向と考察については別稿にまとめた（吉川ら、2008）ので、本報告では、自由記述の分析を中心として、保育者の困り感の内容を整理し、「気になる子ども」の保育を進める上でどんな問題があるのか、また、就学前の地域の相談援助活動のあり方について、検討する。

## 2. 対象と方法

### （1）対象

S県内全私立幼稚園549園の保育者を対象とした。

### （2）調査方法

2006年12月～2007年2月に、郵送による質問紙調査を実施した。無記名自記式質問紙を作成し、各園に5部ずつ送り、協力を依頼した。記入者の選定は各園に一任した。回収は、園ごとにとりまとめて返送してもらった。

### （3）調査項目

質問紙は自由記述を含む13項目からなる。質問内容は、基本属性、「気になる子ども」の有無と気になる特徴、「気になる子ども」の保育の負担感の程度、他機関との連携や支援状況、保育者の障害知識の程度、その他保育上困難を感じることにについて、である。「気になる子ども」の有無、以下、保育者の障害知識の程度までの項目については、複数の選択肢から回答を選択する方法（自由記述を含む）で、「その他」のみ自由記述形式であった。「気になる子ども」の気になる特徴項目は、尾崎ら（2000、2001、2005）の作成したチェックリストを参照し、抜

粋して作成した。

なお、従来の研究における「気になる子ども」の定義は必ずしも一定ではなく、発達の軽い遅れ（知的障害とのボーダーライン）や発達のアンバランス、行動上の問題などをすべて含めた表現となっている場合が多い。本研究では池田ら（2007）の定義にならない、以下のように定めて研究を進めた。すなわち、「調査時点では何らかの障害があるという診断はされていないが、保育者にとって保育が難しいと考えられている子ども」とした。

## 3. 結果

### （1）対象者の属性

協力が得られた278園のうち、集計可能な1,307部を分析対象とした（回収率47.6%）。回答者の年齢は20歳代が最も多く71.0%、30歳代が16.4%で、30歳代以下で87.4%を占めた。経験年数は5年以下が48.8%、6年以上10年以下が31.6%であった。私立幼稚園においては、経験年数の少ない若い保育者が保育の中心を担っている現状がみられた。性別は99%が女性であった。

### （2）「気になる子ども」の保育の実態と支援状況について

調査結果の大半は別稿（吉川ら、2008）にて既に報告しているので、ここでは主な結果を簡単に紹介する。

回答者のうち、今まで担当したクラスに「気になる子ども」がいたと回答したのは95.6%で、非常に高い割合であることがわかった。また、全体の31.6%は「気になる子ども」の保育の負担感が大きいと感じていた。

「気になる子ども」の状態として指摘されたのは、「場面や状況の変化に適應するのが難しい」「すぐに手が出る」「落ち着かない」「ことばの内容が理解できていないようにみえる」「パニックになる」など、ADHDやアスペルガ

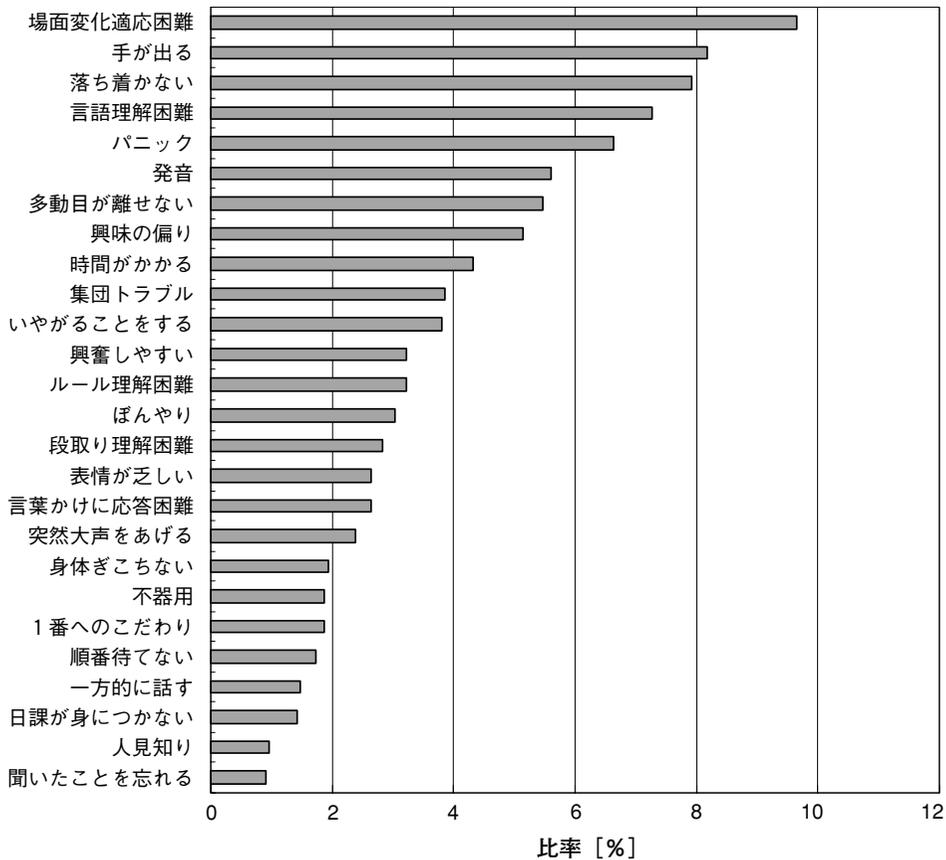


図1 「気になる子ども」の状態

一症候群の特徴とされている項目が多かった(図1)。

保育者の障害の知識の程度を問う質問では、自閉症、ADHDに関してはある程度知識が浸透している様子が見られたが、広汎性発達障害、アスペルガー症候群については十分認識しているとはいえない結果となった。

支援状況だが、支援において困難を抱えていることとして「相談すべき状況かどうか悩む」(38.6%)「保護者に相談を勧めにくい」(29%)「適切な相談先がわからない」(10.5%)が上位を占めた。また相談先の有無については「ある」が67.8%で、具体的な相談先は「保健センター」(115人)「教育相談所」(111人)「医療機関」(67人)などが挙がっていた。

### (3) 「気になる子ども」の保育について

質問紙の最後に、個別支援が必要な子どもの保育に関して日ごろ感じていることを自由記述で尋ねたところ、1,307部中459件の記入があった。本研究者2名と大学院生1名で、KJ法を用いて以下の9つのカテゴリーに分類、集計した。「保護者との関わり」117件、「保育への迷い・不安」80件、「発達に応じた適切な指導」73件、「保育者同士の支えあい」53件、「専門家の対応、他機関との連携」50件、「他児保育との兼ね合い」49件、「特別支援教育に関する感想」27件、「その他」11件、「特になし」15件となった。各分類の主な内容は表1に示す通りである。

表1 個別支援が必要な子どもの保育に関する感想(例)

保護者との 関わり	1	園と家庭での姿が異なるため、家庭へのこまめな連絡が大切。
	2	保護者の方がお子さんの障害に対して認知していないと、支援を勧めるのが難しい。
	3	無関心な保護者が多い。保護者の「理解」が一番大切。
	4	保護者と保育者との考えに温度差があることが多く、伝達の仕方やその先の進め方が難しい。
	5	「しつけ」だけの問題であると軽く考える保護者がいる。
	6	助言や対応も保育者の大きな役割だと感じるが、自分の経験が浅く、難しさを感じる。
保育への 迷い・不安	1	気になる様子が経験不足からなのか、障害からなのか判断がつかない。
	2	どれだけ手を貸してあげたらいいのか、程度が難しい。
	3	人間関係の形成にどう介入してあげるのがいいのか。
	4	同じ障害でも個々の子どもによって対応が違うので、基本的知識だけでは対応しきれないことを痛感している。
	5	障害のタイプがわからないので、対応法が合っているか不安。
	6	障害名が多いので、症状、特徴などを把握しきれない。インターネットなどに情報があふれているため、かえって不安を感じる。
発達に応じた 適切な指導	1	自分の声かけをその子が負担に感じていないか。
	2	こうすればうまくいくという決まった関わりではなく、その子に合わせての試行錯誤が必要なので大変。
	3	子どもの特徴をよく理解し、専門的なことを学ぶことは大切。
	4	毎日の生活習慣を繰り返し積み重ねていくこと。周りの子どもたちとの関わりが重要。
保育者同士の 支えあい	1	ひとりでは対応しきれない場合があるので、補助の先生をつけてもらえるともっと充実した保育ができるのではないと思う。
	2	担任だけでなく、園全体でその子を見守り、アドバイスや情報をもらえることが支えになっている。
	3	その子の特徴をつかむのに時間がかかる。他の子のことも考えたり、自分を冷静に保つためにも、他の保育者との連携は必要。
	4	お手伝いしてもらった教員の確保や費用の確保がスムーズにいくように願っている。
専門家の対応、 他機関との連携	1	障害なのか性格なのか判断しにくく、障害にあてはまるかの判断をしてほしい。
	2	身近ですぐに相談できる人がいない。保育者が気軽に相談できる環境があればと思う。
	3	専門家による定期的、継続的な巡回相談を希望する。研修よりも実際の子どもの様子を見ていただけると助かる。
	4	私立幼稚園に対しての支援が少ないと思う。
	5	療育施設が少ないのが気になる。
他児保育との 兼ねあい	1	周りの子どもがどんどん成長していく中で、その子が目立ってしまわないよう、特別視しないように注意している。
	2	ひとり担任だと、他の子に対して目が行き届かない。
	3	他の子たちのその子に対する見方、捉え方が曲がったものにならないように気をつけている。
	4	周りの子どもに危害を与える子どもに対するフォロー。
	5	その子がいることで、周りの子どもが思いやりの心を持てたり、様々な問題を抱える子どもがいることを知る良い機会になる。
	6	他の子どもの保護者にどう伝えるかが難しい。
特別支援教育 に関する感想	1	日々少しずつ成長しているので、保育でその子に関わることがいかに大切かを実感できる。
	2	本人の成長はゆっくりだが確実にあり、成長を感じた時は嬉しい。
	3	周りの子どもにとってどんな存在になっているのか、気になる。
	4	専門知識・経験を持っている人が少ない。
	5	小学校でついていけるか心配。
	6	「気になる子」という表現は曖昧で危険な言い方だと思う。

#### 4. 考 察

##### (1) 「気になる子ども」の保育に関する感想

「気になる子ども」（質問紙上のこの欄の表記は「個別支援が必要な子ども」）の保育に関して、日ごろ感じていることとして最も多く挙がっていたのは「保護者との関わり」に関することであった。保育者は、保護者との問題意識の共有と発達障害についての共通理解のもとに行う子どもへの支援、保護者との協力関係の構築を求めているが、保護者の「無関心」や「障害の否認」といった態度にいきあたると、どうしてよいか迷い、方針が決められない困惑が生じるようである。特に、子どもが園生活で見せる気になる行動について、どのように伝えるかという伝達の問題、専門家への相談を勧めたいがどのように説明すればよいかという専門機関紹介の問題が、困難感を強める要因となっている。根来ら（2004）は、発達障害はしばしば「見えない障害」と呼ばれ、早期対応の重要な機会を逃してしまう場合が少なくなく、保護者は「障害の気づき」と「障害の否定」の間で気持ちが揺れ動くジレンマ状態に陥ってしまうと述べている。また、保護者の心理状態の深刻さや複雑さを取り上げた様々な研究において、保護者は障害のある子どもの発達や行動そのものから生じるストレスの他に、家族以外の人間関係から生じるストレス、夫婦関係から生じるストレス、など多様なストレスを抱えやすいこと、障害受容プロセスは保護者ひとりひとりによって違うこと、就学・進学が近づくなど子どものライフイベントにより、保護者の抱える悩みが変容していくこと、家族や家族を取り巻く人の状況によっても影響を受けること、などが明確になりつつある（浜谷ら、2002）。保育者は、子どもについての心配ごとをすぐに保護者と共有できると期待しすぎず、保護者の状況や心理状態に配慮しつつ、時間をかけて、話し合える関係を作っていくことが重要であり、保育者支援においては、保育者と保護者の信頼関係の構築を支

え、つなぐ観点が必要である。

「発達に応じた適切な指導」「保育への迷い」「他児保育との兼ね合い」など、保育そのものに悩む感想も多数あった。どの子どもについても日々の保育は試行錯誤の連続だが、子どもの気になる言動が発達障害からのものか、それともその子の個性なのかの判断がつきにくく、研修で得た知識や巷にあふれる情報を活かしきれないジレンマを抱えている様子が伝わってくる。気になる状態の多くが、場面の変化に適応しにくい、言葉によるやりとりや指導が入りにくい、すぐに手が出たりパニックになるなど他児への影響にも注意をはらわなければならない、といった、指導しにくく、指導の即効性や効果そのものが得られにくいものであるため、保育者の不安感は大いであろう。特に、他児の保育との兼ね合いに困難を感じる場合、気になる子どもを特別視しない態度や他児を後回しにしない工夫が必要となる上、他児の保護者との関係にも配慮しなければならないという状況の厳しさがうかがわれた。障害児の統合保育が制度化されて20年余りが経ち、統合教育の良い面に注目した報告は多い（池田ら、2007）。統合教育は障害児、健常児のどちらにとっても発達や行動に良い影響をもたらすという観点から書かれた感想は、今回の調査でも、小数だがみられた。しかし、このような良さを実感し、ある程度の心のゆとりを持って日々の保育を行うためには、保育者を支える日常的、継続的な支援が必要であることは間違いない。

保育者自身は、具体的な支えとして「保育者同士の支えあい」「専門家の対応、他機関との連携」を望んでいた。補助教員の配置や、ベテラン保育者が若い保育者に助言するといった、園全体での支援体制作りは急務であろう。さらに、専門家による定期的、継続的な巡回相談の実施により、子どもの持つ障害の個性に合わせた保育方法を学び、子どもの適応への変化や成長の様子を目の当たりにする経験によって、安心と自信を得て、安定した保育実践に結びつい

ていくのではないか。「保育者が気軽に相談できる環境があれば」「研修よりも、専門家に実際の子どもの様子を見てもらい、助言がほしい」という保育者側の切実なニーズを受け止め、子育て支援のあり方に反映させる必要がある。

## (2) 就学前の地域の相談援助活動のあり方

感想の自由記述の分析から、保育者が「気になる子ども」の保育をする上で困難を感じることに、①保護者との信頼関係形成が難しい、②「気になる」内容が子どもの発達の個人差かどうか迷う、③発達障害の知識はそれなりにあるものの知識と子どもの実態が結びつかない、④相談相手が園内に留まっており外部の専門機関との連携が足りない、など、特別支援教育が広く浸透する上で取り組むべき課題と同様の傾向があることがわかった。

今回の回答者は私立幼稚園教諭で、大半が若く経験が浅い保育者であるため、1つ1つの迷いや不安を、数々の経験を経た保育者に比べてより重大なものを受け止める傾向があるかもしれない。しかし、私立幼稚園においては、若い保育者が中心的な保育の担い手となっているのであれば、彼女らを育て支える仕組み作りが、相談援助活動においてまず取り組むべきことであろう。保護者の不安や焦りを受け止め、保護者の心の支えとなりながらともに歩むには、保育者自身の不安や焦りを受け止めてもらう機会や存在が必要である。専門家による相談の機会が限られている現状にあっては、まずは、「気になる子ども」の支援の実情や担任の困り感、支援に必要となるものなどに関して、園内での十分な話し合いや研修が望まれる(中津、2007)。園全体での取り組み体制を作り、外部の専門家や専門機関が園を支える構造が、実際の有効であろう。

幼稚園側にとっては、外部機関からの支援として、市町村が行っている公的な巡回相談だけでなく、地域にある大学の発達支援相談室や特別支援教育のセンター的役割を担う養護学校と

の連携・活用を視野に入れ、巡回相談の機会確保に努めることが肝要である。特に、近隣の小学校の特別支援教育コーディネーターとの連携を深めることにより、幼・小連携を進めることにも役立つと思われる。

連携先の専門機関としては、少ない巡回相談を補うべく、研修のあり方を検討する必要がある。研修内容は、基本的な知識の学習と具体的な事例検討が有効であろう。支援する側は、される側のニーズをきめ細かくつかみ、保育者の安心感と自信を育てる支援の視点が大切であり、そのためには、短時間でよいので年に複数回訪れ、ひとりの子どもの成長を保育者とともに見守り、その発達の変化を、援助効果と結びつけて確認し、喜び合える関係となれるとよい。

丸山(2008)が指摘するように、「気になる子ども」の保育を内容的に充実・発展させるためには、人的体制の充実と保育者が希望している日常的なスーパーバイズ体制の確保が不可欠である。これらは園と連携先との内部努力だけでは達成できず、行政的な制度としての整備が求められている。「気になる子ども」に含まれる発達障害児の早期発見と支援開始のために、乳幼児期から学齢期にかけての、発達障害をもつ子どもたちと家族、そして育児に関わる人々を支える体制作りは、早急に取り組むべき課題といえよう。

(2009年3月31日提出)

(2009年4月17日受理)

## 謝 辞

ご多忙のところ、本研究の調査にご協力いただきました、各幼稚園の園長はじめ諸先生方に心より感謝申し上げます。

## 参考文献・引用文献

池田友美・郷間英世・川崎友絵・山崎千裕・武藤葉

- 子・尾川瑞季・永井利三郎・牛尾禮子(2007):  
保育所における気になる子どもの特徴と保育  
上の問題点に関する調査研究、小児保健研究、  
66(6)、815-820
- 尾崎洋一郎・中村敦・草野和子・池田英俊(2000):  
学習障害(LD)及びその周辺の子どもたち—特  
性に対する対応を考える、同成社
- 尾崎洋一郎・錦戸恵子・池田英俊・草野和子(2001)  
:ADHD及びその周辺の子どもたち—特性に対  
する対応を考える、同成社
- 尾崎洋一郎・草野和子(2005):高機能自閉症・アス  
ベルガー症候群及びその周辺の子どもたち—  
特性に対する対応を考える、同成社
- 斎藤愛子・中津郁子・粟飯原良造(2008):保育所に  
おける「気になる」子どもの保護者支援—保  
育者への質問紙調査より—、小児保健研究、  
67(6)、861-866
- 柘植雅義(2008):特別支援教育の新たな展開、勁草  
書房
- 中津郁子(2007):子育て支援としての相談活動のあ  
り方—保育所・幼稚園の保育者を対象にした質  
問紙調査から—、小児保健研究、66(1)、46-  
53
- 日本子ども家庭総合研究所(2008):日本子ども資料  
年鑑、KTC中央出版
- 根来あゆみ・山下光(2004):軽度発達障害児の主観  
的育てにくさ感—母親への質問紙調査による  
検討、発達、97、13-18
- 浜谷直人他(2002):保育を支援する発達臨床コンサル  
テーション、ミネルヴァ書房
- 平澤紀子・藤原義博・山根正夫(2005):保育所・園  
における「気になる・困っている行動」を示す  
子どもに関する調査研究—障害群からみた該  
当児の実態と保育者の対応および受けている  
支援から—、発達障害研究、26、256-266
- 丸山美和子他(2008):保育現場に生かす『気になる  
子ども』の保育・保護者支援、かもがわ出版
- 文部科学省(2002):「通常の学級に在籍する特別な  
教育的支援を必要とする児童生徒に関する全  
国調査」調査結果
- 吉川はる奈・尾崎啓子・細瀬富夫(2008):幼稚園教  
諭を対象にした保育現場における軽度発達障  
害の意識調査に関する研究、埼玉大学紀要教  
育学部、57(1)、159-165

# Surveillance Study on Difficulties of Childcare for “Children with Special Needs” in Private Kindergartens

Keiko OZAKI and Haruna YOSHIKAWA

Keywords : Kindergarten teachers, Children with special needs, Developmental disability, Questionnaires, Analysis of free descriptions

The purposes of this study are; 1) to classify the kindergarten teachers' concerns about children with special needs, 2) to consider how to support kindergarten teachers. The questionnaire survey is held and 1,307 kindergarten teachers reply. As a result, the following four points are found out on the difficulties of childcare by teachers for children with special needs. 1) It is difficult to establish a relationship of mutual trust between parents and teachers. 2) Decision is unable whether the special needs are just individual variations or not. 3) The knowledge of developmental disability is hard to be related with the actual situation. 4) Advisers are limited in the kindergartens.